

「子どもが好きだから」 - 保護司として30年 -



あかし ようこ
明石 容子

1938年(昭和13年)
江東区森下生まれ
小松川在住

少年の気持ちに寄り添って

「面会に来てくれないお母さん 忙しいのかな でも会いたいな」少年院に行った時、少年の作った句ともつかない歌が壁に貼ってあったんです。まだどっかに母親を恋う気持ちがあるんですよね。面接でわが家に来た子に、「夕飯食べたの。残ってるものでもいいか、一緒に食べよう」と、声をかけると、ほろっとするんです。

保護司としてのわたしの役目は、保護観察になった人たちの気持ちを受けとめて寄り添い、話に耳を傾けて共感することだと思うんです。成人の更生はなかなか難しいけれど、少年はなんとかなる。だからつい少年には力が入っちゃうんですよね。

少年院に入って、小学校1年生か2年生のような字を書いていた子が、1年経って退院するころには、印刷したような字で手紙を送ってくるんです。街で「先生じゃないの」って肩をポンとたたかれて、「あれえ、立派になって、結婚したんだあ。良かった、良かった」って、自分のことのように嬉しくて。わたしにも男の子が3人いますから、子どもを育てるのと同じなんです。

保護司になったのは、長男が大学生、三男が中学生になったころでした。保護司で小松川小学校の歯科校医をしていらした新井先生の推薦です。家が近いので目にとまったんでしょうね。昭和57年当時は、まだ男社会だし、小松川分区では前の方が定年で辞められてから女性保護司がいなかったんです。そのころ女子少年のケースが増えてきて、「これからは女性保護司が必要になってくるから」って。自分の勉強になるとってお引き受けしました。

44歳で保護司になって

保護司になるのに、法に触れたことはないかなど調査があって、法務大臣の名前で委嘱され、3日間ぐらい研修を受けました。身分は非常勤の国家公務員だけど、交通費が出るだけのボランティアです。

保護司の仕事は、執行猶予や刑期を残して刑務所や少年院から出所した人の更生を助け、再犯を防ぐこと。刑期が終わるまで、保護観察所の担当主任官と相談し

ながら、身元引受人との調整や就職のお世話、生活面の相談など社会復帰への手助けをします。

以前、少年の場合は、ほとんど親が引受人になったんです。「お父さんもお母さんも、君が一日でも早く帰ってくるのを待っているよ」と言える場合は、家に帰ってきてもうまくいくんです。家族との調整がつかず家に帰れない人には、まず住まいを見つけてあげなければなりません。

少年に限らず、行き場の無い人が一時的に身を寄せる更生保護施設という場所があるんですよ。民間の施設で、自立の準備や衣食住の面倒を一定期間だけ見てくれるんです。国からのわずかな援助の他はほとんどが寄付で、本当にぎりぎりのところでやっているんですよ。主任官と相談して、そこへ行って、引受人の調整をするんですよ。

彼らは出所した時はほとんどお金を持っていないんですよ。入所中に工場で働いたり、封筒貼りをしたりして得た作業手当がわずかにあるくらい。だから、更生への一番の妨げは無職なんです。仕事に就けば生活設計も立てられますからね。「仕事は希望だよ」って、わたしはよく言うんです。「あの仕事は決まったの」と聞くと、「給料が安く」と言うので、「我慢することも必要なんだよ」って。「どんな仕事をしたいの」「自分は料理が得意だから」とか話をします。

以前は保護司の裁量で働き口を探していたんですけど、限界があるし雇用主にも迷惑をかけちゃうんですよ。約束の日に出社しなかったり、安全靴や作業服を用意してもらっても2、3日で連絡もなく辞めてしまったりしてね。「どうしたの。ご迷惑かけているんだよ」と言っても、「自分には合わないから」と自分勝手な理由でね。最近はハローワークにも専門の方がいて、刑務所や少年院に入っていたブランクも頭に入れて相談に乗ってくれるので、昔に比べれば支援体制が整備されてきたと感じますね。

他にも、側面から自立をサポートしてくれるボランティアの応援団がいるんですよ。BBS会(Big Brothers and Sisters Movement)は、少年たちのお兄さんお姉さん役として、勉強をみてくれたりキャンプに連れて行ってくれたり、少年と同じ目線で相談に乗って成長のお手伝いをする青年グループです。更生保護女性会は保護司の奥さんや女性保護司のグループで、不用になったジャンパー

vol.15
2013年
5月



江戸川区
聞き書き
研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

やスーツ、歯ブラシなどの日用品を集めてくれたり、バザーのお金で新しい下着を買ってくれたりします。

この間ね、保護観察所に行く途中「明石さん」って声をかけられて、振り返ると、かつて保護観察を担当した青年でした。どうしたかな、頑張っているかなって時々思い出していたんです。工事現場で働いている姿が嬉しく、偶然の出会いに感謝しました。早速、主任官に「すぐそこで働いていました。今度見てやってください」って申しあげましたよ。



◆すすくすくスクールで絵を描く子どもたちと明石さん(中央)

子育てが原点

昭和13年9月1日江東区森下で生まれ、3歳ごろに小岩に移りました。父は人を使ってらくだのシャツを製造していました。昭和18年になると、戦争でだんだん食べるものがなくなり、仕事がある父を残して母と弟と、北海道の斜里郡しゃりにある母方の田舎へ疎開したんです。戦争が終わって小岩に戻ったのは、小学校2年生だったと思いますね。

江戸川のこっち側から見えるのは、千葉県市川市の真間まま、国府台こうのだい、それに大きなガスタンク。河川敷の整備も無く、土手を下りるとアシヤススキが背高く生えていて、川辺の土は粘土質でつるつる滑るんです。近所の子どもたちと一緒に、裸足でお尻を泥だらけにして遊んだり、棒っきれを持っていじめっ子を追っかけたりしていましたよ。あの風景がわたしの原風景なんです。

高校は隅田川高校の定時制に入りました。父親が病気になり困窮したので、平井のライオン油脂株式会社で働きながら卒業したんです。職場は、「もう学校に行く時間だよ」と言ってきて働きやすかったですね。「美味しいおそばが出るよ」と誘われ社内冊子の編集に携わったり、山岳部では温泉付きで谷川岳に行ったりして、楽しゅうございました。

食べ物に釣られて社内の俳句の会に入ったのがきっかけで主人と知り合い、昭和35年、22歳の時に結婚。葛飾区柴又で新居を持ちました。辞めたくはなかったんですけど、昭和38年に長男を出産し退職しました。次男と三男は千葉県船橋市の高根公団に住んでいる時に生まれたんです。

子どもはもう本能的にかわいくって、チュッチュ、チュッチュしていました。何がなんでも子どもはかわいい、「子どもは命」っていう感じですね。子育て仲間に恵まれて、お風呂だのご飯だのってよく面倒を見合いました。うちの子もその子もみんな

一緒にドタバタしていましたけれど、すごく楽しく子育てしたんです。

長男が中学1年生の時、小松川の主人の実家に移りました。それからPTAの役員を9年ぐらいやり、子ども会にも関わりました。母親たちは外に勤めるってことはあまりなく、家で内職をする時代でした。今のように娯楽もなく家族旅行もありませんから、「キャンプしよう」「多摩テック遊園地に行こう」「子ども会対抗の運動会だ」って、子ども会は活発でしたよ。

時代と共に少年野球やサッカーのチームができると、親たちから「子どもは時間が無いし、親も手伝えない」っていう声が増え、子ども会存続の危機もありました。「子ども会はいろんな家庭の子が、いろんな条件を取り払って参加できる、地域で子どもを育てる原点だから、絶対なくしちゃダメ」って言い続けて、今でも子ども会のことで駆けずり回っているんですよ。

熱い思いでこれからも

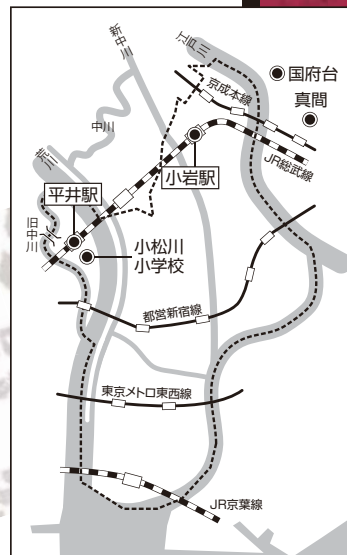
保護司の任期は2年で、再任され続けますけれど、更新の時76歳になっていると定年。わたしもあと2、3年で退任です。振り返ってみると保護司として30年、よく続いたと思います。来ると言っても来ない。連絡も無い。本当とは思えない言い訳でも、「それじゃ、しょうがないね」と耳を傾け、信頼関係を積み重ねてきたんです。事務的にこなせるような仕事では無いということも勉強して、広い考え方ができるようになりましたね。

女性に生まれてきて良かったと思います。楽しい子育ての経験が、保護司としての今のわたしにつながり、法務大臣賞や瑞宝双光章をいただけたのだと思いますね。家庭がちゃんとして心配ないということも土台にあったんでしょうね。家を空けることが多いわたしに、「早く行け、明石時間だと言われるぞ」って、快く送り出してくれる几帳面な主人と子どもたちの協力にも感謝しています。

そう言えば、あの原っぱを走り回っていた時のいじめっ子が校長先生になっていたんですよ。わたしもびっくりしたけれど、向こうもわたしが保護司なんて想像もしていなかったんじゃないですか。

保護司のかたわら、長いこと子ども会や町会で地域にどっぷり浸かってきましたけれど、6年前から小松川小学校のすすくすくスクールで、水彩画教室を月に1回やっています。多い時は、3、40人来るんですよ。今は、子どもたちと一緒に絵を描くのが楽しみです。

「町内が平和かどうか一回りしてくるね」って、よく孫たちに冗談を言って出かけるんですよ。近所の子どもたちに、「明石のおばさん、頑張ってるじゃん」って言われると、「まだまだこれからも」という気持ちになりますね。



◆インタビュー／2012年3月
◆聞き手／伊藤直美 平野靖子 小林明美
◆コーディネーター／磯合真理子 樋口政則 小野塚和江

◆お問い合わせ◆
江戸川区女性センター
☎5676-2455(代)